

---

# J Kは魔法のコトバ

千住夏樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

JKは魔法のコトバ

### 【Nコード】

N6128L

### 【作者名】

千住夏樹

### 【あらすじ】

岡崎とは通学の電車の中で出会った。わたしをずっと狙ってたんだって、相当の決心がいったようだ、元来がヘタレだからね岡崎。

しつこくしつこく股間を押し付けてきたんだけど、何も言わない様子見るとスカートの中に手を突っ込んできた。

さすがにいらっとして腕を思いつき掴んで睨んでやった。

見たら長髪のけっこうイケメンで、顔が真っ赤だった。ユデダコか

よ、次の駅で腕を掴んだまま強引に降りた。舐めんなよJKを。

## その1

今日、先生にリスバンのこと責められた。派手だから学校にしてくんなって。

無理やり外そうとしたから見せてやったら「あらっ!?!」っとか言っつて目を背けた。

それ以上は何も言わなかった。

分からない、なぜするのか……気づいたら、赤くミミズバレになつて時々自分でもビックリするんだ。時々その真っ赤な血を見るとまだ生きてるんだなっと思う。まだ、生きてるんだワタシ。

朝から学校さぼつてずっとオナニーしてた。

ママにはお腹痛いってウソついた。ママ、ナニも言わない。悲しげな表情するだけ。言いたいことあつたら言えば！ 聞く気ないけど……。

ママの留守中に岡崎が遊びにきた。メールでオナニーしてるって呟いたらさっそくきやがった。なんか、笑える。

岡崎とは通学の電車の中で出会った。わたしをずっと狙ってたんだって、相当の決心がいったようだ、元来がヘタレだからね岡崎。

しつこくしつこく股間を押し付けてきたんだけど、何も言わない様子見てるとスカートの中に手を突っ込んできた。

さすがにいらっつとして腕を思いっきり掴んで睨んでやった。

見たら長髪のけっこうイケメンで、顔が真っ赤だった。ユデダコだよ、次の駅で腕を掴んだまま強引に降りた。舐めんなよJKを。

「すいません、すいません、つい出来心で、すいません」

「謝って許されるなら警察いらないだろ。この痴漢が！」  
この時点でやばい！目撃者いないじゃんとか、冤罪とか言われるじやんとか思ってたけれど、  
行き帰りに会う痴漢にはむしゃくしゃしてたし、見るからに気が弱そうなやつだったから、そのまま飛ばした。  
人目があるからとキオスクの裏で話そうとこっちが連れてかれた。図々しいやつだ。

「時々、電車途中で目が合ったよな、ずっと見てたのかわたしのこと？」

「はい、いえ、あの、その、三ヶ月前くらいから、ずっと、あの、その……」

「ばかああ！ それじゃあストーカーじゃんか！ 尻まで触りやつて」

反省の色が見えないのでお尻に蹴りを入れてやった。ローファアの先っぽが尻にめり込んだ。

「いてええええええ」  
うずくまりやがった。

「許してください。もう、もう、二度とこんなことしませんからああ」

許してやるもんか、イケメン顔が更に癩に障った。

「その耳にしてるi-podよこせよ、股間押し付け料と尻触り料だ」

イケメン、少し躊躇したけれど、素直に差し出した。

どっちが犯罪者だ、これってかつ上げじゃんか、と思ったけれど物の弾みだ、仕方ない。

おずおずと上目遣いに見上げてる。負け犬みたいな目だ。

「水色の縞々だね……」

こいつ、この期に及んで、何を言ってるんだ！？

後頭部にもう一発蹴りを見舞った。

ぶっ倒れた。股間を押さえてた。

「いつちやっただみたいだ……」

なんだって!?! こいつ、こいつ、イケメンはガチなMだった。

その後のことはよく分からない。代えのパンツを買うからコンビニまで付き合ってたとか、マックおごるとか言われて、好きな音楽で話が弾んで、自己紹介して、携帯の番号交換して、それ以来なんだか友達だった。

岡崎環は美大の三年生、父親は通産省だかの高級官僚。母親は有名な青山にある画廊の経営者。つまりボンボン、金持ち、親のスネを齧れるだけ齧って生きてる典型的甘ちゃん。

「見せてよ、葵の、その、その、オナニー見せてよ」

相変わらずのヘンタイだった、岡崎は正常なセックスができない……  
…そうだ。

けっこう付き合ってるけれど、身体を求めてきたことは一度もない。ラブホにいつでも岡崎の要求は……で、自分でいっちゃうんだな、まあ、多分ワタシも嫌いじゃないんだと思う、こいつのこと。

「もう終わったから、岡崎に見せるオナはない!」

岡崎はとつても悲しそうな顔をした。まるで明日世界が終わってしまふような顔だった。

ざまあ見る、知ったことか。

その日はカラオケで弾けた。最後に岡崎が望む変なかつこうをした。股間を踏んづけてと言っから能動的3分間を歌いながら踏んづけた。

岡崎はきっかり3分で果てた。

ずっとまじめにほとんど毎日10キロは泳いだつてのに、記録会は最低だった。

期待される水泳部の部長のはずなんだぞ、ワタシ。

ワタシは頑張ったんだぞ！ 頑張った結果がこれかよ、年下にも負けたよ……。

センターなのになんで失格なんだよ。心が折れそうだと、更衣室で呟いたら、岡崎からのメール。

《自分に頑張ったねって、小声で呟けよ、でないと心が寂しがるから》

泣いた。タオルを巻いて泣いた。声押し殺して泣いた。後輩もまだいるから。大声で泣きたかった。ワンワン声出して泣きたかった。涙が後から後から溢れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6128/>

---

JKは魔法のコトバ

2010年10月11日05時28分発行